メッセージ　（2024年第1回授賞式、金沢大学）

宮本　憲一

地球環境問題など環境問題は最も重要な国際政治経済問題になっていますが、この社会科学の本格的な研究が始まって、まだ半世紀もたっていません。日本では1989年私の『環境経済学』（岩波書店）が経済学では最初の出版であり、環境経済学会はその後結成されました。このようにまだ新しい分野で、課題は広がっているので、若い研究者の活動が求められます。また環境の市民運動も70年代から始まっていて、社会運動として注目されるのは近年のことです。同じように地域経済や地方自治の分野も問題の深刻な状況に比べ、研究が本格化して、半世紀しかたっていません。

　このような状況なので、金沢大学がこの新しい分野の研究や運動を開拓するために表彰制度を作っていただいたことに感謝いたします。

　この第1回の応募に充実した研究図書と市民運動から応募があったことは、今後の発展に期待を抱くことができ、大変うれしく思っています。

　受賞作についての推薦委員会の評価は適切で、付け加える必要がありませんが、少しだけ感想を述べます。

1．星野高穂『屎尿処理の近現代史』

　星野高穂さんの研究対象の屎尿処理問題の歴史は人間の生活環境の安全な持続のために、基本にかかわる問題史です。特に産業革命以後の都市化に伴って、労働者の住居の過密化の中で、屎尿処理は重大な環境・衛生問題となりました。このため都市問題として扱われて、その基本的対策が欧米では下水道建設を基本としました。しかし日本では江戸時代から農村の肥料として処理をする完全循環方式が進められてきました。星野さんの業績は、屎尿問題を都市問題とするのでなく、都市と農村の交流として、歴史的に解明したことです。この下水道だけに依存しなかった日本の廃棄物の完全循環利用方式は欧米からも注目されています。マルクスの「資本論」（1867年）にも日本の便所の話は出てきます。ところが日本政府は過疎対策に名を借りて90年代以降農村にまで下水道を普及させようとしたために、下水道財政は市町村財政の赤字問題の中心になっています。能登半島震災で下水道管の破壊による屎尿処理の困難が生じました。また復興に当たっても下水道中心の処理方式にすべきではなく、共同浄化槽など、人口集積の度合いと地形に会った整備が合理的です。

メキシコの哲学者イリイッチは公害研究委員会との懇談で、1985年のメキシコの大地震で都市の下水道の破壊により市民が雪隠詰めになった反省から、都市でも下水道のみに依存するのは危険であり、日本政府が屎尿の都市―農村循環方式を辞めたことを批判しました。このような意味で、星野さんの著作は都市政策の歴史にとどまらず、環境問題として、今後の都市と農村を共生させる政策として、大きな意義を持つと思います。

２．金沢大学宮本賞市民運動部門

「沖縄環境ネット」

沖縄県は豊かな環境に恵まれていますが、日米の基地の公害や大規模公共事業による環境破壊が進んでいます。私は復帰前に沖縄を調査して、米軍基地の公害・環境破壊や復帰政策による海を汚染する石油コンビナート造成に反対してきました。１９９７年、日本環境会議の支持のもとに、宇井純さんをリーダーに沖縄環境ネットワーク結成され、以後米軍基地の騒音公害・PFASの水汚染、大規模公共事業による赤土汚染などの海洋汚染等の告発と防止運動、近年では南西諸島要塞化の自然破壊・住民生活侵害反対するなど沖縄の中心的な市民運動の中心的な役割を果たされています。沖縄の未来について、重要な業績の表彰です。

「NPO法人愛のまちエコ倶楽部」

　国は湖沼の環境を守る法制を持たなかったため工場の立地や干拓によって湖沼の汚染が広まり、それは下流近畿千数百万の水源としての機能を失わせる危機を生んだ。特にその原因となったのは合成洗剤などによるリンの汚染であった。1984年滋賀県武村正義知事は日本最初の「湖沼水質保全特別処置法」を制定するなど環境保持に努めたが、この背後には生活協同組合による廃油を石鹸に変えて、合成洗剤の市言いようを防止する運動があった。その後この運動は滋賀県環境生協理事長藤井綾子の指導で菜の花を植えて、それから採取するてんぷら油の廃油をリサイクルして自動車などの燃料油にするなどの完全循環型のまちづくりに取り組んでいる。持続する社会を足元から作る先駆的なまちづくり運動で、今後の内発的発展の模範となる運動で、素晴らしい表彰と思います。